論　文

現代ギリシャ語における「移動の動詞」と「視点」との相関性

橘　孝　司

0. 現代ギリシャ語は、或る主体または対象の移動を表現するためのさまざまな動詞を有してる。例えば、

(a) τρέχω「走る」περπατώ「歩く」πετώ「飛ぶ」

(b) ανεβαίνω「上る」κατεβαίνω「降りる」

(c) φεύγω「去る」γυρίζω「帰る」

これらの動詞は、

主体・対象が位置を変える際、どのような状態にあるか(a)

始発点と到達点との空間関係(b)(例えば、到達点が始発点よりも高い場合　ανεβαίνω)、

始発点または到達点と移動主体との帰属関係(c)(例えば、始発点が何らかの観点において、主体に属する場合　φεύγω)

といった意味論的特徴により使い分けられている。

ところで、これら以外に、始発点・到達点と話し手・聞き手との語用論的関係に基づいて使い分けられる基礎動詞グループが存在する。これらの動詞グループを日本語の動詞に対応させてみると、おおよそ次のようになる。

(d)	πηγαίνω	「行く」	(e) πηγαίνω/παίρνω	「連れて行く・もって行く」
	έρχομαι	「来る」	φέρνω	「連れて来る・もって来る」

つまり、これらの動詞は、話し手の視点(deictic center)が始発点・到達点のいずれに置かれるかにより、その使い分けがなされる[1]。到達点に視点のある場合 έρχομαι が、そうでない場合 πηγαίνω が用いられる、と概括的に言えよう。しかしながら、個々の例を見ていくと、この対応に当てはまらない場合がある。したがって、この動詞グループの使い分けの全体的な究明のためには、関与的な条件であると思われる、移動の主体及び移動の到達点の二点

が変わると、どの動詞が使われるのかを見てみなければならない。

以下の考察では、(d)の二つの動詞について、移動主体が、話し手・聞き手・第三者の場合に分け、さらにそれぞれにおいて、移動の到達点が、一人称・二人称 ・三人称の各々の場合に、どのような表現がなされるのかを調べていくことにする。到達点が一人称という場合 σε μένα ばかりでなく、σε+話し手のいる場所を示す名詞、さらに、これにかわる副詞表現εδώ をも含めることにする。二人称・三人称も同じ意味で用いる。(より詳しくは註 2)を参照)

1.移動主体が話し手

1.1.到達点が一人称

話し手が現在いる場所に言及する場合、その視点は当然その場所にある。したがって、έρχομαιが使われる。

(1)Μέχρι να έρθω εδώ δεν είχα εργαστεί ποτέ. Π.
「私はここに来るまで働いたことがなかった。」

(2)Ήρθα στην Αθήνα και σπούδασα νηπιαγωγός. Π.
「私はアテネに来て保母の勉強をした。」

(3)Ήρθα στην Αθήνα πριν 2 εβδομάδες.
「私は二週間前にアテネに帰ってきた。」

(3)に見られるように、έρχομαιは、「話し手のいる場所へ移動する」という意味に加えて、「その場所に以前にいた」という含意を持ち得る。

1.2.到達点が二人称

この場合も έρχομαι。話し手が始発点にいるにもかかわらず、視点は聞き手のいる到達点に置かれている。つまり、πηγαίνωとέρχομαιの使い分けにおいて、関与的であるのは、始発点ではなく、到達点である、と考えられる。他方、日本語訳との対照から明らかなように、日本語では「行く」が使われるところである。

(4)Μπορώ να'ρθω στο σπίτι σου τώρα; (電話で)
「いま君の家に行ってもいい?」

(5)Της χτήπαγα το κουδούνι κι όλο "έρχομαι","έρχομαι" και "έρχομαι" μου φώναζε. Μ.

「私が彼女のベルを鳴らすと、彼女はいつも「いま行く、いま行く。」と叫び続けるのだった。」

1.3.到達点が三人称

πηγαίνωが用いられている例として、

(6)Αν θυμάσαι,δεν πηγαίνω εκεί και πολύ συχνά.
「憶えているかもしれないけど、私はそこへはそんなにしばしばは行かない。」
(7)Αύριο δεν θα πάω στο Πανεπιστήμιο.
「明日は大学には行かないつもりだ。」

(6)(7)ともに、到達点には話し手も聞き手もいないため（視点がないため）πηγαίνω が使われている。

他方、έρχομαιを用いる次のような場合もある。ここでは、到達点を示すδωμάτιο「部屋」に二人称の所有代名詞 σου がついている。

(8)Χτες ήρθα δυο φορές στο δωμάτιό σου, αλλά έλειψες.
「昨日あんたの部屋に二度行ったのに、いなかったわ。」

しかし、到達点が聞き手に属する場所であれば、つねにέρχομαιが用いられるかと言うと、そうでもない。

(9)Μπορώ να πάω στο σπίτι σου τώρα;
「いま君の家に行ってもいい？」

聞き手の家以外の場所で対話がなされる場合、(9)のような表現もあり得る。その場合に、聞き手自身は家に帰らず、話し手一人が、聞き手の家に行くことになる。これに対し、話し手といっしょに聞き手も自分の家に帰る場合は(4)と同じ形式が用いられる。

(10)Μπορώ να'ρθω στο σπίτι σου τώρα;　（＝(4)）
「いま君の家に行ってもいい？」

つまり、発話時点で聞き手が到達点にいなくても、そこに行く予定の場合（話

し手が到達点に着いた時点で聞き手もそこにいる場合）*έρχομαι*が使われる。また、(9)と(10)のような文ペアが存在する以上、(8)において、*έρχομαι*が用いられるのは、到達点が聞き手に属する場所だからではなく、聞き手が到達点にいるもの、と話し手が想定していたからであると考えねばならない。ただ実際には、聞き手がそこにはいなかっただけのことである。

同様に、例えば、聞き手がアテネ在住の人であり、話し手の到達点が「アテネ」であっても、対話の場所がアテネ以外であれば、到達点には話し手も聞き手もいないのだから*πηγαίνω* が用いられる。

(11) *Έχω <u>πάει</u> μερικές φορές στην Αθήνα.*
「私はアテネに何度か<u>行った</u>ことがあるよ。」

1.2.で、到達点が二人称の場合*έρχομαι*が用いられる、と述べたが、しかし、正確に到達点に聞き手がいる必要はない。聞き手のいる場所が到達点に近く、その範囲内である、と話し手が捉えさえすれば、到達点には視点が置かれ得ることになり、*έρχομαι*が使われる。

(12) *Πρώτα θα <u>πάω</u> στους Δελφούς και μετά θα ανέβω στη Λαμία. Την Κυριακή θα <u>έρθω</u> στο Βόλο, οπότε θα περάσω από τον Αλμυρό. Να βρεθούμε, άμα έχεις καιρό.*
「まず明日デルフィに<u>行き</u>、その後ラミアに上るつもり。日曜日にはヴォロスに<u>行く</u>から、アルミロスを通る。時間があるなら、会おう。」

(12)は、アテネにいる話し手がアルミロスの町の聞き手と電話で話している例であるが、アルミロスからは離れている（と話し手が感じている）デルフィに対しては*πηγαίνω*を用いているのに対し、アルミロス近郊の都市ヴォロスには*έρχομαι*を使っている。

このように、到達点（或はその近隣と話し手の感じる範囲内）に話し手・聞き手がいる場合、たとえ聞き手がいなくとも、いるものとして話し手が想定している場合、さらに、聞き手が将来そこに行く予定である場合、到達点には視点が置かれ、*έρχομαι*が用いられると言える。逆に、到達点が話し手・聞き手に属している場所であっても、聞き手がそこにいなければ（あるいは、上の条件に合致しないならば）*πηγαίνω*。

1.4.移動主体が一人称複数

移動主体に聞き手が含まれない場合（いわゆるexclusive plural）は、上で述べたのと同様である。

(13)Θα'ρθείτε αύριο στη γιορτή μου;
Ναι, θα'ρθούμε.
「明日私のお祝いに来ますか。」
「ええ、行きますよ。」

他方、移動主体に聞き手が含まれるならば（いわゆるinclusive plural）到達点が三人称の場合、常にπηγαίνωが用いられるのではないか、と思われる[3]。（聞き手が、話し手といっしょに移動する以上、到達点には、話し手・聞き手がいないことが、話し手には明らかであるから。）しかし、この点については、今後の調査に待ちたい[4]。

(14)Πάμε μαζί στο χωριό μου;
「いっしょに私の村に行く？」
(15)Θυμάσαι πότε πήγαμε στην θεία μου;
「いつ私の伯母さんちに行ったか覚えてる？」
(16)Θα ήθελα πολύ να ξαναπάμε στο στέκι μας.
「私たちがよく通った場所にまたいっしょに行きたい。」

2.移動主体が聞き手
2.1.到達点が一人称
到達点に話し手がいて、視点がそこに置かれるので ἔρχομαι。

(17)Έλα κοντά μου. Δ.
「私のそばへおいで。」
(18)Γιατί ήρθες εδώ;
「なぜここに来たの？」

2.2.到達点が二人称
この場合も、1.2.と同様である。

(19)Πότε ήρθες εκεί;　（電話で）
「いつそっちに帰ってきたんだ？」

*έρχομαι*が「もといた場所に帰る」というニュアンスを持ち得ることは(3)で述べた通りである。

2.3.到達点が三人称

(20)Χτες <u>πήγες</u> σινεμά;
「昨日映画に<u>行った</u>の?」
(21)πότε <u>πήγες</u> στην θειά σου;
「いつ君は伯母さんちに<u>行った</u>んだい?」
(22)Μια μέρα να <u>έρθεις/πας</u> στην θεία μου.
「いつか私の伯母さんちに<u>来てよ/行ってよ</u>。」

(22)で、*έρχομαι*を使うと、話し手が伯母さんの家のすぐ近くに住んでいるか、或は自分があたかも伯母さんの家にいるかのように、つまり、到達点である「伯母さんの家」に視点を置いて話している。これに対し、伯母さんの家から離れて住んでいる場合(到達点に視点が置かれていない場合)は、*πηγαίνω*が用いられる。

(23)Γιατί δεν <u>ήρθες</u> εκεί στην πόρτα; Σε περίμενα μισή ώρα....
「どうしてあのドアのところに<u>来な</u>かったんだ?半時間君を待ってたのに」

(23)での到達点「ドア」は、話し手と聞き手が待ち合わせをした場所である。話し手はドアのところに行ったので、そこに視点を置いて話している。もし、話し手もそこに行かなかったならば、視点は置かれず、(24)のように *πηγαίνω*が使われる。

(24)--- Μήπως <u>πήγες</u> εκεί στην πόρτα; Εγώ δεν πήγα.
--- Δεν πειράζει...ούτε εγώ πήγα. Το'χα ξεχάσει.
「あのドアのところに<u>行った</u>?僕は行かなかった。」
「別にいいわよ...私も行かなかったから。忘れてた。」
(25)Θα'<u>ρθεις</u> κι εσύ;
「あなたも<u>来る</u>?」

(25)では、話し手と聞き手とがいっしょに始発点にいて、発話時には話し手はまだ到達点にいる訳ではないが、そこに行くことは確実であるので、聞き手の移動に対して*έρχομαι*が用いられている。つまり、話し手は視点をすでに到達点に置いて発話している。これに対し、話し手が始発点から動かない場合、聞き手の移動には、(26)のように、 *πηγαίνω* が用いられる。

(26)Πήγαινε, σου λέω, έκανε πιο μαλακά. K.
「行けよ、頼むから、と彼は口調を和らげて言った。」
(27)--- Μήπως θα πάτε στο γραφείο σας αύριο;
--- Όχι,αύριο δεν θα πάω. (教授と、電話で。)
「明日教官室に行かれますか？」
「いや、明日は行きません。」

(27)の最初の文において、聞き手が到達点にいないことを話し手は知っており、明日到達点にいるかどうかも確実ではない（それゆえ、この対話がなされている）ために、到達点には視点が置かれず、*πηγαίνω* が用いられている。但し、教授の教官室の近くから電話をかけている場合は、到達点に話し手がいるので、(28)のようになる。

(28)--- Μήπως θα έρθετε στο γραφείο σας αύριο;
「明日教官室に来られますか。」

3.移動主体が第三者
3.1.到達点が一人称
1.1,2.1で見たようにここでも *έρχομαι* が使われる。

(29)Ίσως την άλλη εβδομάδα έρθει και η Κατερίνα να μένει εδώ στην Αθήνα για λίγες μέρες.
「おそらく来週、カテリーナもこのアテネにやって来て、数日過ごすはず。」
(30)Η νέα εποχή έρχεται. E.
「新しい時代がやって来る。」
(31)Είναι αλήθεια πως ο εικοστός αιώνας ήρθε φέροντας μαζί του το δικό του μελλοντικό πάθος. E.
「確かに二十世紀は自ら将来への情熱を伴ってやって来た。」

(31)では、*έρχομαι* とともに *φέρνω* が使われている点が注目される。0.で述べたように、視点に関して、この二つの動詞は共通している。

(32)*Δεν σου λένε από που <u>έρχονται</u>...* E.
「彼女達はどこから<u>来た</u>のか決して言わない....」

(32)はある女性達へのインタビュ-記事。到達点は、彼女達及びインタビュ-ア-(=話し手)のいる場所である。

3.2.到達点が二人称
(4)(5)同様、ここでも、日本語では「行く」が用いられるところである。

(33) *Ο γιός μου <u>ήρθε</u> σε σένα χτες το βράδυ;*
「昨夜息子が君のところに<u>行きました</u>か?」

3.3. 到達点が三人称

(34) *Ο Γιάννης <u>πήγε/ήρθε</u> στη Μαρία.*
「ヤニスはマリアのところに<u>行った/来た</u>。」

最も明白であるのは、話し手がヤニスまたはマリアと同じ場所にいる場合である。始発点にヤニスとともにいた場合は*πηγαίνω*、到達点にマリアとともにいる場合は*έρχομαι*が用いられる。しかしながら、上で見てきたように、話し手は正確にこの「ヤニス/マリアのところ」にいる必要はない。つまり、客観的な距たりではなく、話し手が心理的に近隣であると感じているかどうかが問題となる。自らが到達点にいるように感じれば、*έρχομαι*を用い、始発点にいるように感じれば(到達点には視点がないのだから)、*πηγαίνω*を用いるのである。

(35)*Σ'αυτό το διαμέρισμα <u>πήγαινα</u> .....για να την πάρω να <u>έρθει</u> στο γύρισμα.* M.
「私はその部屋に<u>行き</u>‥‥彼女を撮影に連れて<u>来る</u>のだった。」
(*έρθει*の主語は「彼女」)

(35)の話し手は映画監督であり、視点は「彼女の部屋」ではなく、「撮影所」

に置かれているために、「彼女」（女優）が「撮影所」へ移動する場合には *έρχομαι* が使われている。（「私」（監督）が「彼女の部屋」へ移動する際は *πηγαίνω*）

(36)Αν <u>*έρθει*</u> ο κύριος μαζί μου να διαλέξει τις πλάκες...
「もしこの方が私といっしょに<u>いらして</u>、レコード盤を選んでくださるなら....」

(36)では到達点が、話し手の行く予定の場所でもあるので、第三者の移動に *έρχομαι* が用いられている。

(8)(9)(10)でも見たように、到達点を示す名詞を所有代名詞が修飾しているかどうかは両動詞の使い分けの決め手にはならない。(37)では、「彼自身の畑」への移動であるにもかかわらず、*πηγαίνω* が用いられている。

(37)Το πρωί...καθώς <u>*πήγαινε*</u> στο χωράφι του, δεν γέλαγαν πια. Φ.
「朝彼が自分の畑に<u>行く</u>時、誰ももう彼を笑わなかった。」

4.結語

以上の考察より得られた結果を表にしてまとめてみよう。

到達点→ 移動主体↓		一人称	二人称	三人称
話し手	sg.	*έρχομαι*	*έρχομαι*	*έρχομαι* *πηγαίνω*
	pl. incl.	*έρχομαι*	-----	*πηγαίνω* (?)
聞き手		*έρχομαι*	*έρχομαι*	*έρχομαι* *πηγαίνω*
第三者		*έρχομαι*	*έρχομαι*	*έρχομαι* *πηγαίνω*

この表を見ると、常にέρχομαιが用いられるのは、到達点が一・二人称の場合であることが分かる。換言すれば、到達点に対話の参加者（話し手または聞き手）が存在する場合である[5]。

他方、到達点が三人称の場合には、いずれの動詞も使われ得る。その使い分けは、話し手が、どの程度到達点を自らに近いと感じているかによっている。近いと感じられる度合いが高いほど、すなわち、視点を置きやすいほど、έρχομαιが使われることになる。このことはまた、到達点が一・二人称の場合έρχομαιが使われることと関連している。対話の参加者のいる場所であれば、話し手に身近かなものである、と感じやすいからである（一人称の場合、話し手自身のいる場所であるし、二人称の場合も、話し相手（聞き手）のいる場所は、たとえ電話などを使っての間接的な対話であれ、心理的には身近な対象であることが多いから。）

最後に、移動の主体が話し手と聞き手（inclusive plural）で、到達点が三人称の場合には、πηγαίνωしか使われないのではないか、と考えられる。対話の参加者の双方が移動する以上、到達点に視点は置き得ないからである。

このように、έρχομαιは、到達点に視点が置かれる場合に用いられるが、このことが、έρχομαιはπηγαίνωに比べて、到達点が限定されているという点にもつながるのではないか、と考えられる[6]。

なお、本稿の骨子は、第二回ギリシア語学・文学研究会（1990年7月8日於広島大学）で発表されたものである。

註

1)辞書でέρχομαιは次のように記述されている。

κινούμαι πλησιάζων προς τον τόπον εν ω ευρίσκεται ο καλών με ή εκείνος προς ον γίνεται ο λόγος,ή ο περί ου ο λόγος. Στ.

「私を呼ぶ人、或は話題になっている人、または話題になっていものの存在する場所へ近づき、移動する。」

2)現代ギリシャ語では

έρχεται σε μένα. 「（彼が）来る--へ--私」

という文が可能であり、日本語の「彼が私のところへ来る」における「ところ」のような形式名詞を必ずしも必要とはしない。（そのような表現がないわけで

はない。例えば、

Τον είδαμε νάρχεται προς το μέρος μας. Σ.

「我々は彼が我々の方へやって来るのを見た。」）

それ故、日本語では、「彼が私のところに来る」と「彼が私の家に来る」とは平行した構造であるが、前者に相当するギリシャ語表現 έρχεται σε μένα は到達点が一人称、後者に相当する έρχεται στο σπίτι μου は三人称として分析していくことにする。これらの点を、対応する日本語の例とあわせて図示しておこう。

一人称	σε μένα σε X（Xは話し手がいる場所） εδώ	私のところに この部屋に ここに
二人称	σε σένα σε X（Xは聞き手がいる場所） εκεί	あなたのところに そちらの部屋に そちらに
三人称	σε Y（Yは第三者を示す（代）名詞） σε X（Xは第三者がいる場所） εκεί	一郎のところに あちらの部屋に あちらに
	σε X（Xは話し手ないし聞き手に属する場所.所有代名詞を伴うこともある） εκεί	私・あなたの部屋に あちらに

3)Fillmore(1966)には英語に関して同様の指摘がある。

4)純粋に空間移動に関するものではないが、inclusive plural で έρχομαι を用いていると思われる例としては、

Ας έρθουμε τώρα, όπως υποσχεθήκαμε, στις αντίθετες μαρτυρίες.
(Βελούδης,Γ.& Ει.Φιλιππάκη-Warburton (1983) Η υποτακτική στα Ν.Ελληνικα. Μελέτες για την ελληνική γλώσσα.)
「約束してあった通り、今我々は反例をとりあつかうことにしよう。」

5)この点で、現代ギリシャ語の πηγαίνω/έρχομαι の使い分けは、英語の go/come の使い分けに類似している。しかしながら、印欧語族に属する言語であれば、常にこれらと同じ使い分けをすると考えるのは早計過ぎるようである。例えば、スペイン語の ir/venir のペアにおいて、話し手が二人称のところへ行く場合は、ir が用いられるという。(Comrie(1985)p.15)

6)例えば Traugott(1978)p.377,n.10 参照

引用資料

E.: Ένα 3 (7-3-1990)

K.: Κείμενα νεοελληνικής λογοτεχνίας.(1982)

M.: Μπουνιάς,Α. 30 χρόνια πίσω από την ΚΑΜΕΡΑ της FINOS FILM.

Π.: Πάνθεον τ.928 (17-1-1989)

Σ.: Σαμαράκης,Α.(1965)Το λάθος.

Στ.: Σταματάκος,Ι.Δ.(1971) Λεξικόν της νέας ελληνικής γλώσσας.

Φ.: Φακίνου,Ε (1989) Η μεγάλη θάλασσα.

略号のない例文は、インフォーマントの Ευαγγελία Γιαννούλη さん（アテネ大学文学部3年生、Αλμυρός生まれ）から採集させていただいた。彼女との会話の中から集めたもの以外に、筆者が用意した質問文をチェックしていただいたものもふくまれている。

参考文献

Anderson,S.R.& Keenan,E.L.(1985) Deixis. Language typology and syntactic description III (ed. by Shopen,T.) pp.259-308.

Comrie,B.(1985) Tense. Cambridge Univ.Press.

Fillmore,Ch.J.(1966) Deictic categories in the semantics of 'come'. Foundations of language 2. pp.219-227.

Newton,B.& Veloudis,I.(1980) Intention, destination and Greek verbal aspect. Lingua 52. p.269-284.
Traugott,E.C.(1978) On the expression of spatio-temporal relations in languages. Universals of human language 3. (ed.by Greenberg,J.H.) pp.369-400.
柴谷方良・影山太郎・田守育啓(1985)「言語の構造ー理論と分析ー意味・統語篇」くろしお出版
寺村秀夫(1982)「日本語のシンタクスと意味」くろしお出版
森田良行(1990)「基礎日本語辞典」角川書店

The relation between the verbs of movement and the deictic center in Modern Greek

Takashi Tachibana

In Modern Greek there are two verbs of movement,i.d.piyeno,erchome, whose usage is not concerned with the semantics of the method of movement, but rather with the deictic center of the speaker.

The purpose of this article is to examine various examples in the hope of finding out the conditions under which each verb is used.

A few, but decisive, differences between these verbs and the corresponding verbs in Japanese (iku,kuru) are also pointed.